

## 第11回 室町時代の社会・経済

今回は、室町時代の社会・経済について学ぶことになる。このあたりは、比較的出題も多いから、きちんと学習しよう。

### 1. 惣村の成立

鎌倉時代後半から、畿内を中心に**惣村**が形成されていった。その要因は、①農民の地位向上によって領主。地頭らの不当な要求に対して農民たちが団結したこと。②南北朝の内乱を通じて、村の自衛が強まったこと。③農業生産力の上昇によって大規模な名田経営が次第に解体し、多くの独立的小農が成長してきたこと。こうしたことをあげることができる。従来、名主に隷属してきた下人・所従が作人として独立し始めたのである。さらに、荘園領主の支配に代わり、守護大名が領国支配を強めると、農民は地位的結合を強めていった。このような地位的結合をなした村を惣村という。惣村は地理的に近いいくつかの村が結びつくこともあり、こうした場合を郷村とよんだ。

### 2. 惣村の構成

惣村は、乙名・沙汰人・番頭とよばれる指導者と一般の作人からなっていた。村の運営は、**寄合**によって決まっていたようで、惣掟を定めていた。また、掟の違反者に対する処罰も行った。これを自検断もしくは地下検断という。このように団結した村には、「惣の地」とよぶ共有地（入会地）があった。

年貢納入についても、惣全体で一括する地下請（百姓請）を採用した。さらに、上層農民を中心に集まる惣村の神社の祭祀組織である**宮座**で村の祭礼が取り決められた。

農民がこうして結びつきを強めると、それを基礎に荘園領主に対して年貢減免や非法代官の排斥を要求するようになった。農民たちは、鎮守の森に集まって寄合を開き、神の前で神水を飲み交わした（これを一味神水という）上で、百姓申状に要求を記し、交渉を行った。領主に対しての抵抗は、愁訴（困っているから どうにかしてくれと權威筋に頼みこむこと）、強訴（不平・不満を持った人たちが、手続きを踏まず、団体行動を取って要路の人に訴えたこと）、逃散などの方法が取られるが、荘園領主に対するこうした農民の組織的抵抗を荘家の一揆という。

### 3. 土一揆

貨幣経済の浸透は農村にまで達した。農民たちは、年貢負担に苦しんだだけでなく、寺院や高利貸しに土地を質入れし、借金をしなければならなかった。そこで、この貸借関係

の破棄を願う徳政令を要求し、武器を持って立ち上がった。(中世の一揆と近世、特に江戸時代の一揆では、武器を農民たちが普通に持てたか、持てなかったに違いがある。中世の武士は兵農未分離の時代の武士であるから、農民から武士になることも可能だったし、逆に農民が武器を所有することも可能だった。と言って、近世の農民が全く武器を持たなくなったというのも厳密に言えばおかしいのだが、とにかく、武装蜂起が可能だった。なお、一揆が起きる直前などに投石が行われることもあった。もっと小さい頃、石投げしたことありませんか？石礮いしづぶてです。昔、そう言えば、学生運動でも石が飛んだような…。お～！嫌。1968 世代って。若い皆さんは分かるはずないよね。気にせず、スルーしてください。分かる人だけここで笑って 1 回お休みです。ちなみに、ピッチングマシンで飛ばした奴もおったそうなの…。)

#### ①正長の徳政一揆

1428 年 1 月、4 代将軍義持が死に、義教が 6 代将軍に就任した。こうした幕政の大きな変化の時期、同年 8 月、近江坂本の馬借たちが徳政を要求して蜂起すると、近隣の山科・醍醐の農民たちも決起し、京都に乱入した。彼らは土倉・酒屋・寺院を襲い、借用書を破った。管領の畠山満家がようやくこれを鎮圧した。しかし、農民たちの中には、奈良柳生の徳政碑文に見られるような私徳政を宣言するものもあった。

#### ②播磨の土一揆

正長の徳政一揆は、翌年播磨に広がった。農民たちは、守護赤松満祐の武士たちの国外追放を要求し、蜂起した。結局、赤松方に鎮圧されたが、徳政令を出させることができた。

#### ③嘉吉の土一揆

さらに、1441 年、嘉吉の乱で将軍義教が殺され、義勝が 7 代将軍になった。農民たちはこの間の幕政の混乱に乗じて、京都の七口（粟田口＝東海道、伏見口＝南海道、白川口＝東山道、鳥羽口＝西海道、大原口＝北陸道、西七条口＝山陰道、東寺口＝山陽道）を閉鎖し、「代始めの徳政」を要求し、遂に一国平均の徳政令を出させることに成功した。これ以後、京都周辺では大小の一揆が毎年起こるようになった。なかでも、1454 年と 57 年の享徳・長祿の一揆は大規模であった。これに加えて、1459 年からは、京都で大量の餓死者が出るなど社会の混乱は深まっていった。これに対して幕府は、債務者から借銭の 10 分の 1 を幕府に納めれば、借金の破棄を認めるという分一徳政令ぶんいちとくせいれいを出した。また、後には、逆に債権者が分一銭を納めれば、債権の継続を認めるという分一徳政禁令を出している。

### 4. 応仁・文明の乱

8 代将軍義政の時代、政治は著しく腐敗してきた。義政は「花の御所」の復旧をはじめ

土木事業に熱中する一方、政所執事伊勢貞親や夫人日野富子につながる側近に動かされる無能な政治家であった。徳政令を13回も発し、そこで得た収入を銀閣造営にあてた。

守護大名の間では、家督相続争いが頻繁に起こっていた。その背景には、守護大名の力が次第に弱まり、守護代や有力な国人たちが台頭し、争いに介入するようになったことがある。三管領のうち、斯波氏の家督は、義敏と義廉よしかどによって争われていたが、これは、事実上、守護代の織田・甲斐氏や越前の有力国人朝倉氏などに動かされたものだった。畠山氏でも持国の引退後義就よしなりと政長が争っている。

こうした家督相続争いにきちんと決着をつけるには、将軍義政がどちらかを任命しなければならぬのであるが、将軍は政務を放棄してしまい、幕府の実権は山名・細川両氏が握っているため、混乱が一層激しくなってしまった。これに加え、義政には跡継ぎの男子がいなかった。そこで義政は弟の義視を後継者とし、細川勝元に後見させたが、この決定から1年後、夫人日野富子が義尚を生み、山名宗全（持豊）に将来を託した。

守護大名の家督相続争いに加え、将軍家の相続争いが起こり、遂に大規模な内乱が起こった。応仁・文明の乱である。義視—細川勝元—畠山政長—斯波義敏のグループ（東軍）と、義尚—山名宗全—畠山義就—斯波義廉のグループ（西軍）の対立は、1467年、両畠山氏が御霊社で衝突したことをきっかけにはじまった。戦いは、京都を主戦場に行われ、内裏・室町御所や各寺院・神社が焼け、都は焼け野原になってしまった。（史料の『応仁記』には、「汝なれやしる都は野辺の夕雲雀ひばり 上がるを見ては落る涙は」という歌が載っていますね。あれって、都＝都会に雲雀は飛ばないわけです。だって雲雀は、スズメ目ヒバリ科の鳥で、普通、畑に巣を作って空高く飛ぶのです。畑があるってことは、田舎とまでは言わないにしても、都市周辺でないといけません。ところが、都で雲雀が飛び上がるのは、京都の町が焼け野原になって畑のようになっていたことを記しています。それほど焼けてしまったことを嘆いたのです。なお、嘘か本当か知りませんが、西園寺公望は、大正～昭和初期の公家出身の政治家ですが、代々公家＝貴族の出ですから、「大事なものは、応仁の乱（応仁・文明の乱）で皆焼けた」と語ったとか…。本当としたら、すごいよね。そんな前から続いている貴族＝公家の家で、一度言ってみたいね。「大事なものは、応仁の乱にみんな焼けてしまった」って。所詮、貧乏人の子こせがれのひがみですけど。）

1473年、山名宗全、細川勝元が相次いで死に、戦いの目標が失われた後も戦いが続き、77年、諸大名が帰国してようやく乱が終了した。この戦いで「足軽」（「真如道縁起絵巻」の絵を参照してください。）とよばれた歩兵集団が活躍したことが良く知られている。（戦いに参加するだけでなく、夜盗・強盗・押し入り・火付けなど何でも来い、のダーティな集団です。）乱によって義政は義尚に将軍職を譲った後、東山山荘を営み、政治を省みることはなかった。政治は夫人日野富子自身が行った。関白・太政大臣の一条兼良は、富子に『小夜のねざめ』を、義尚に『樵談治要』を贈り政道を説いたが、まともな政治は行われなかった。乱により秩序が乱れ、「下剋上」の世が到来したのである。

#### ◆応仁・文明の乱の影響

この乱の結果、幕政を支えていた大名の連合体が解体した。乱後、守護の在国化が進み、幕府の守護統制権が失われ、全国政権としての幕府の支配体制が崩れていった。

## 5. 山城国一揆

応仁・文明の乱後も京都周辺では対立が続いていた。畠山政長・義就の両派とこれに結びついた大和の国人、越智・筒井らが南山城一帯で戦っていたのである。戦いが長期化するにつれてこの地方の人々の不満は高まる一方であった。そしてついに 1485 年、南山城の 4 郡（宇治・久世・綴喜・相楽）の国人たち（15 歳～60 歳）は集会を開き、①畠山両軍の南山城からの撤退、②荘園に対する従来の支配関係を元に戻すこと、③新関の停止などを決議し、両畠山氏に突きつけたのである。さらに、国人たちは、翌年、宇治平等院で会合し、36 人衆とよばれた国人を中心に国掟を決めた。（昔、この宇治平等院での会合を「戦国時代に開かれた国会」と評価した研究者もいます。）彼らは、この国を「惣国」とよび、月行事を決め、1493 年までの約 8 年間にわたり自治的な支配を行った。

## 6. 一向一揆

北陸で活動していた一向宗（浄土真宗）の門徒たちは、より幅広い行動を行った。蓮如の精力的な布教（蓮如って、とっても筆まめな方。消息という手紙をたくさん書いています。これで門徒をまとめていたのですね。）によりこの地方には真宗の末寺・道場が多数存在し、そこを中心に定期的に開かれる門徒の寄合＝講を基礎に体系だった組織が出来上がっていた。彼らは、1487 年、將軍義尚の命令で近江六角氏の打倒のため、守護大名富樫政親が軍を派遣した隙を狙い、ついに翌 1488 年、一向一揆を起こした。急を聞いて富樫政親が帰国したが、倒されてしまった。一揆側は名目上の守護に富樫泰高を立てたが、実際には一向宗門徒が支配する国＝「百姓が持ちたる国」（本願寺法国）となった。以後 100 年間、加賀は本願寺の支配下にあった。一向一揆は、三河・尾張・長島でも起きている。一向一揆は、1570 年から織田信長との間で戦われた石山合戦で終結する。

## 7. 法華一揆

京都の町衆（庶民）は、日蓮宗の信者が多かった。彼らは、1532 年、細川晴元が山科本願寺を攻撃した時、晴元に協力し、本願寺を焼き払った。これより 5 年間、京都の町政は日蓮宗信者により運営されることとなった。さらに、日蓮宗と延暦寺との対立が深まり、1536 年には延暦寺側が近江六角氏の援助を受け、京都の日蓮宗寺院 21 カ寺を焼いた。この事件を天文法華の乱とよぶ。

## 8. 産業の発達

### ①農業

鎌倉時代、畿内・瀬戸内海沿岸にはじまっていた二毛作は、全国に普及した。また、室町時代に西国では、三毛作（三毛作とは、米・麦・蕎麦そばの栽培）が開始された。

稲の品種改良も進み、早稲わせ・中稲なかて・晩稲おくてが生まれ、東南アジア原産のインディカ米である大唐米も栽培された。大唐米は、味は今ひとつだが、炊き増えがし、虫にも強いので庶民が食べた（ベトナムに行くようになってから、私はインディカ米が気にならず食べられるようになったし、おいしく感じる）。

また、灌漑・排水施設の整備も進み、竜骨車や水車が使用された、水をめぐる問題は、農民にとれば重要なことで、桂川周辺の用水の共同利用の様子はよく知られている。（京都の郡部に住んでいる私は、水利組合があることを引越してから知った。水はそれほど大事なのだ）農民たちは、「番水」といって、水を自分の田に順番に取り入れることも行ってきた。さらに、商品作物栽培も広がった。例えば、荏胡麻えごまは瀬戸内海地方で、麻は越後で栽培され、各地に特産品が生まれていった。

### ②手工業

商品作物栽培の増加や、農村内の社会的分業によって専門の職人が増えていった。（教科書には、職人の絵が挿絵で掲載されているから、良く見てください。）彼らが作る製品が特産品となっていった。絹織物では加賀・丹後・常陸、紙では播磨の杉原紙以外に美濃・越前が知られている。製陶では、尾張・備前の伊部が知られている。

### ③その他の産業

漁業では、網・えり漁法が発達した。また、製塩業は、揚浜式から入浜式に変わっていった。産地としては、伊予弓削島・讃岐塩飽島などがある。製鉄業は、たたらたたらの改良によって玉鋼たまがねの生産が可能となり、金・銅の精錬法も発達した。

### ④商業

市は、月三回の三斎市から月六回の六斎市に回数が増え、商人たちの指定販売の座席＝市座が設定された。また、見世棚の数も増え、連雀商人や振売りといった行商人によって商品が遠くまで運ばれた。行商人には、大原女おはらめや桂女かつらめなどもいた。大原女は炭・薪などを頭に乘せて販売する女性で、桂女は、鶺鴒あひろ飼集団あひろの女性で、鮎あひろなどを売った。（教科書に掲載されている桂女の絵で頭に乘せている桶の中には魚＜多分、鮎など＞が描かれている。昔、何を乗せているのか質問したら、「バナナ」と答えた生徒がいて、びっくりしたことがある。室町時代にはバナナは入って来ていないぞ！）また、室町時代には大市とよばれる卸売市が生まれた。京都の三条や七条の米場や淀の魚市がそれである。

## ⑤座

鎌倉時代に発生した座は、その数も増え、規模も拡大した。もともと座は公家・大寺社に属し、労役を奉仕する人々への代償として年貢・公事の余りを販売することを認めたものであった。京都には朝廷を本所とする四府駕輿<sup>しふかよちようぎ</sup>座や石清水八幡宮を本所とする大山崎油座、北野神社の<sup>こうじ</sup>翹座、祇園社の綿座があり、奈良では、興福寺の大乗院の下に 80 余りの座があった。

## ⑥貨幣

貨幣の流通量は増加するばかりだった。特に明銭が多く使用され、標準貨幣として永樂通宝が使用された。しかし、貨幣の供給が追いつかず、模造銭や私鑄銭が作られた。そのため、取引の場合にはこれらの悪銭（<sup>びたぎに(せん)</sup>鏹銭）を選り分ける撰銭行為が行われ、一般的な現象となった。そこで、幕府や守護大名は取引の円滑化と公正をはかるため、鏹銭と良銭に対する割合を決めて撰銭行為をやめさせようとした。これを**撰銭令**という。この命令は、1500年～1542年までに幕府は10回出したものである。違反者に対して、男は首切り、女は指切りという厳罰であったが、これほど頻繁に発せられたということは、逆に撰銭がやまなかったことを示している。

## ⑦金融業

酒屋・土倉などの金融業者が盛んになった。守護大名らの収入は、銭を中心とし、領地の生産力は年貢高を基礎に貨幣で換算されるようになっていった。これを**貫高制**という。但し、貫高制には銭納を原則としながらも、銭納と現物納とが混合したものが多い。

## ⑧交通

産業が盛んになり、遠隔地取引が多くなるにつれて交通も発達した。重要な役割を果たしたのは水上交通で、瀬戸内海・淀川を中心に廻船が発達した。室町中期に成立したといわれる「廻船式目」は、兵庫・坊津などの業者が提唱した海事法規である。造船所として、兵庫・大湊・鳥羽が有名である。

陸上交通も盛んになった。大津・坂本の馬借や車借が運送業者として知られる。また、鎌倉時代の問丸は、従来の年貢の保管・販売以外に仲買・運送・商人宿を経営する問屋へと発展した。交通量の増加に目をつけた幕府。寺社・公家などは各地に関所を設け、関銭や津料を徴収した。

## ⑨都市の発達

室町から戦国時代にかけて各地に新興都市が発達していった。まず、寺社の門前に生まれた**門前町**は、寺社参詣の人の増加に伴い発達した都市で、宇治・山田・長野が知られる。**寺内町**は、一向宗寺院を中心に発達した都市で、自衛・防御のための環濠集落になってい

る。石山・吉崎・貝塚・今井（大和）・富田林などがある。また、寺内町の中では、市座が否定され、自由取引が認められていた（楽市）。

港町は、三津（博多津・坊津・安濃津）を中心に各地に港町が生まれた。なかでも近年注目されるようになった草戸千軒町は、港町と常福寺という寺の門前町を兼ねていた。1673年、ここを流れる芦田川が氾濫し、町全体が水没し、それが発掘されたもので、当時の庶民の日常生活品や漁具・農具さらには位牌なども発掘された。

城下町は、戦国大名の拠点である。小田原（北条氏）、一乗谷（朝倉氏）、春日山（上杉氏）や府中（駿河・今川氏）などがある。

自治都市としての性格を持つものもある。堺は 36 人の会合衆が管理し、博多は 12 人の年行司が管理していた。京都についてはすでに述べたが、町組を京都内部で組織し、町ごとの町掟が作られていた。祇園祭も彼ら町衆の手で行われた。